

トマスおよびスコトゥスの個体化の
理論の思想的な位置づけに関して
——大鹿一正氏の発表をめぐって——

清水哲郎

大鹿一正氏は本発表において、個体化の問題に関して、中世においてはそれが神の創造をめぐる問題であったことを認めながらも、むしろ、普遍と個物をめぐるアリストテレス以来の系譜における哲学の問題としてこれに焦点をあてておられる。そのようなアプローチから、トマスが指定された質料の規定に苦勞したのに対し、スコトゥスは種を特定する形相の原理を作り、結果として最下位形相の更に下位に個的な形相の原理を作りだした、というところにスコトゥスの新しさを見ておられる。また、単に個物一般において考えるにとどまらず、ことに人間個体ないし個々の魂における個体化の問題に注目しておられる。これに対する私の以下のコメントは、もっとも個体らしい人間ないし魂にではなく、個物一般に関わるものに過ぎない。また、アリストテレス的系譜を背景におく代わりに、12世紀ないしそれ以前の西欧中世における個体化の理解の系譜を背景において、氏の提示されたトマスおよびスコトゥスの考えを位置づける試みに過ぎない。

さて、トマスやスコトゥスよりも時代を遡って、西欧中世の思想をあさってみると（いささか風呂敷を広げていえば）、神の創造ということの理解に、質料—形相関係を巡る次の二つの本当は両立しにくい発想があって、それが全体としていけば混在していた。それを背景に当時の「現実の個物は如何にして成り立っているか」についての論が立てられていた。

〈発想1〉 創造に先立つ神の内なるアイデアが、制作者のうちにある構想ないし設計図、モデルになぞらえて理解され、ことばによる創造という思想と結び付いている。これは、しばしば、創世記冒頭でまず〈無形の質料〉 *materia informis* が創造されたとする解釈と結び付く。無形の質料と設計図があると、あとはデーミウルゴスの制作が成り立つのである。例えば、アンセルムス『モノロギオン』第9, 10章を思い起こされたい——*homo* すなわち *animal rationale mortale* は神の内なる *ratio* にし

て設計図だったのである。

〈発想2〉より新プラトン主義の流出説に近い発想であって、ポルフェリオスの樹は、その梢から根へと実際に事物が生成してきた *contractio* の過程と解される。これによると *animal rationale mortale* は設計図ではなく、生成の過程のある点における存在者を本来指している（これは分かり易さのためちょっと言い過ぎているかもしれないが、コメントだから許していただきたい）。*contractio* の過程は、より類的な存在者を *materia*（質料、材料）として、これに *differentia*（種差）という形相が結び付いて、より種的な存在者になっていく過程であり、その過程はついには種という質料に個別の諸形相が付加して個物となるところにまで到達する、というものであった（ここで質料—形相という用語をこの文脈に即して理解していただきたい）。

実例を挙げる。アベラルドゥスが言及するジャンボアのグォレルムスのはじめの立場、すなわち、〈質料としての存在者本体〉（*essentia materialis*）論は、上の発想2を背景にしていると解し得る（LI 10-13）。例えば個々の人は同一の〈人〉を質料（材料）とし、これに個別の特徴である諸形相が加わって個別化しているのであるから、質料としての〈*essentia*=存在者本体〉である人そのものが、普遍という性格を帯びているとされる。さらに人はひとつの動物という存在者本体を質料としてこれに固有の種差という形相が加わって種的存在となっているものである。こうしてどんどん遡っていくと、実体のカテゴリーについていえば、ついにはすべての個体は結局、実体というひとつの存在者本体を質料としているということになる（つまり存在者本体の数はカテゴリーの数だけになる）。

この立場は、現実に存在するものはすべて個体であることを認める。そのうえで次のように考える。ここにミヤウチとオオシカという2つの個体がある。ここから2つを2つの個体たらしめている諸形相を取り去ってみるとしよう。するとそこに残るのは、普遍〈人〉として個体差のまったくないいわばのっぺらぼうの人そのものである。これはのっぺらぼうではあるが、すでに血や肉をもち、生きた存在者である（このところが、発表にあったトマスの *essentia* 理解——*materia non signata* にかかわる——に影響していないか、気になる）。さてこののっぺらぼうの人は、2つの人そのものではなく、一つの人そのものであるという。こうした人そのものを *essentia* といい、「ミヤウチとオオシカは *essentia* としては同一の人だ」ということになる。さらには、このお二人は馬のアオとも *essentia* としては同一の動物なのであ

る、云々。この立場は発想としては、蠟細工のようなことを考えていて、蠟のかたまりに形をつけていくことに、質料に形相が付加される過程をなぞらえている。いわばまだ色のつけられていない人型が材料としてあって、これに目鼻が書き込まれていくようなもの、といってもよいだろう。

シャンプーのギレルムスは、はじめこの立場であったが、アベラルドゥスに論破されて〈無差異〉(indifferens) 論になったとされる。すなわち、個々の人から個別の諸形相を取り去る(ないし括弧にいれる)ときに残る存在者本体は同一の人ではなく、essentia として別々の、personaliter に異なる複数のものであるが、互いに全く差異がないというその意味で(indifferenter) 同一であって、普遍の性格をもつとする(LI 13-16)。つまり、遡った場合、個体の数と同じだけのいわば裸の実体(それ以上の形のない)が存在者本体としてあることになる。これは質料=存在者本体論をちょっと改訂しただけのようにも見えるが、よくつきつめてみると、相当違う。はじめから実体は個体の数と同じだけあるが、indifferens だということになる。個別の差異は、個的形相の付加において出てくる。(ところで、ここでの indifferens という使い方は、本発表のスコトゥスに出てくるのと似た文脈なのだが、影響しているのではないだろうか? 「各個別者に内在する共通本性の实在……数的な一性より小さい实在的一性……数的な一性より小さいというのは、それ自体としては自己以外の他の多に対して indifferens であることによる」といった本発表の解説はこの理論の発展形を示しているのではないか。)

さて、無差異論はさらに、人間の集合を人という種だとする説(集合説)と、人である限りのソクラテスとソクラテスである限りのソクラテスとを区別して前者を普遍とする説(同一説)とに分かれる。後者からすると諸個人は〈人〉という(普遍的)ものにおいて互いに一致するということになる。

これに対し、唯名論者アベラルドゥスは、質料としての存在者本体論に対しては、全く共感をしめさない。しかし、無差別論のうち、同一説にはやや親近感があるように思われる。つまり、これが諸個人は〈人〉というものにおいて一致するというのに対し、その修正定式「諸個人は〈人〉というものにおいてではなく〈人である〉ということ、すなわち人という〈事態〉(status) において一致する」としたのである。

この点は彼が、先に挙げた発想 I すなわち設計図モデルを採用していることと関連すると私は推測している。彼はプリスキアヌスを使って、創造に先立つ、神のうちに

る概念ないしアイデアに肯定的に言及してもいる（ただし、これが普遍だとは明言しないが）。神の内なるアイデアを認めるならばプラトニズムにして実在論になってしまうのでは、と思うのは早計であって、ものにおいて類・種に対応する *essentia* を認めようとする実在論を否定し、しかも創造という考えを保持する選択肢として、神の内なるアイデア説があり得たというべきだろう。ただし、神のうちなるアイデア説をとったら唯名論かということ、もちろんそうとは限らない。

さて、以上のような事情を背景にしたときに、本発表で提示された二人の思想家の位置づけはこうなろう——12世紀に登場する普遍に関する実在論は、いずれも種に個別の形相が付加するという仕方でも個別化を考えていたのであって、スコトゥスの思想はこの系譜に連なるといえるだろう。むしろトマスのほうが新しいアリストテレスの考えを採用して、つぎはぎをするのに苦労しているのに対し、スコトゥスは、〈質料—形相〉は〈材料—設計図〉と対応させて理解していたとしても、より古い実在論の考え方を採用している、ということになるのではないだろうか。

ちなみに（本発表では、配布資料に引用されていたとはいえ、具体的に言及されはしなかったが）、オッカムは神の内なるアイデアという発想1をも否定して、神が創造以前に見ていたのは未来に存在する諸個物自体であり、それら諸個物が見る働きの対象であるのでアイデアと呼ばれるのだ、と一刀両断の語釈をする（*Ordinatio* I dist. 35, q. 5）。つまり、神は時を越えてすべてを現在のこととして知るのだから（これについては拙論 *Time and Eternity-Ockham's Logical Point of View, in Franciscan Studies* 50 参照）、設計図などという、人間の能力に応じたものを類比的に適用するのは間違いなのである。ところが、設計図がなくなれば、形相か質料かといった個体化の問題もなくなってしまふ。まさに、オッカムにおいて個体化の問題はなくなると言われる通りである。

* * *

討論報告（司会者）

宮内 久光

大鹿氏は個体をめぐる諸問題の中からトマスとスコトゥスにおける個体化の原理の問題に限定して発表された。